

氏名(本籍)	さとうひろつね 佐藤広英(茨城県)		
学位の種類	博士(心理学)		
学位記番号	博甲第5056号		
学位授与年月日	平成21年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	CMC (computer-mediated communication) における匿名性が脱抑制的行動に及ぼす効果		
主査	筑波大学教授	博士(心理学)	吉田富二郎
副査	筑波大学教授	文学博士	松井豊
副査	筑波大学准教授	博士(心理学)	綾部早穂
副査	筑波大学准教授	博士(心理学)	加藤克紀

論文の内容の要旨

本論文は、従来“個人を特定できる情報が分からない状況”として捉えられてきた匿名性を、“誰が匿名か”という関係性の観点と、“どの情報が匿名か”という情報の観点から捉え直し、CMCにおける匿名性が脱抑制的行動(攻撃的言動、自己開示)に及ぼす効果を実験的に検討することを目的とする。本論文によって、CMCにおける自分や相手のどの情報が匿名なとき、脱抑制的行動が促進(抑制)されるのかを明らかにできると考えられる。

本論文は、理論的概観、実証的研究(5つの実験研究と1つの調査研究)、総括の三部で構成される。以下にその概略を述べる。

第I部：理論的概観

第1章では、従来のCMC研究における匿名性の捉え方について整理し、本研究における匿名性の新たな捉え方(関係性および情報の観点)を提案した。第2章では、CMCにおける脱抑制的行動を扱う研究を概観し、従来の研究の問題点および未検討点を整理した。最後に、第3章において、本研究の目的を明らかにした。

第II部：実証的研究

第4章・第5章・第6章では、CMCにおける匿名性が脱抑制的行動に及ぼす効果を検討する際、どのような実験場面および脱抑制的行動の測定方法を用いるべきかについて、従来の枠組み(CMCとFTFの比較)で検討した。その結果、脱抑制的行動が生じやすい実験場面を設定し、行動を多角的に測定することによって、CMCが脱抑制的行動を促進することを明確な形で示した。

第7章では、CMCが脱抑制的行動に及ぼす効果を媒介する要因を検討した。その結果、CMCにおける私的自己意識・課題志向性の高まりや他者への親密感の低下が攻撃的言動の増加につながる可能性、CMCが直接自己開示を促進するだけでなく、他者への信頼感の低下を媒介として自己開示を抑制させることが示された。

第8章では、CMCにおける匿名性を二者の関係性の観点から、“自己の匿名性”と“他者の匿名性”の二側面に分離し、それぞれが自己開示に及ぼす効果を検討した。その結果、(1) CMCにおける自己の匿名性

は不安感を低減させ、それが自己開示量の増加、抵抗感の低減へとつながること、(2) CMCにおける他者の匿名性は、相手に対する親密感を低減させ、開示の内面性を抑制させること、(3) 両者が同じ条件にいること（匿名性のバランス）が自己開示量を増加させること、の三点が示された。

第9章では、CMCにおける匿名性を情報の観点から捉え、自己、他者のどの種類の情報が匿名なとき、自己開示が促進（抑制）されるかについて検討を行った。質問紙調査の結果、自己の識別情報（顔写真や名前）の匿名性が自己開示を促進させる可能性、他者の属性情報（性別や年齢）の匿名性が自己開示を抑制させる可能性が示唆された。また、CMCにおける他者の属性情報の効果を実験的に検討した結果、CMCにおける他者の属性情報は、相互作用中の不安感を減少させ、他者との相互作用を促進し、攻撃的言動のようなネガティブな脱抑制的行動を抑制する可能性が示された。

第Ⅲ部：総括

第10章では、実証的研究の結果について、匿名性が自己開示、攻撃的言動に及ぼす効果を整理し、本研究における匿名性の新たな捉え方の重要性を示した。自己開示に関しては、自己の識別情報が知られることが自己開示の抑制につながることで、他者の私的情報（趣味や性格）、属性情報、識別情報が分かることが自己開示の促進につながることで指摘された。攻撃的言動に関しては、自己の識別情報が知られることが攻撃的言動の抑制につながる可能性、他者の情報全般が分かることが攻撃的言動の抑制につながる可能性が示唆された。最後に、本論文の限界について整理することで、今後の課題をまとめた。

審 査 の 結 果 の 要 旨

これまで、匿名性は“状況”として捉えられてきた。それに対して本論文は、匿名性を、誰が匿名か（関係性）、どの情報が匿名か（情報）、という新たな観点から捉え直し、脱抑制的行動に及ぼす効果を検討した。このような匿名性への新たなアプローチはオリジナリティの高いものとして評価される。そして、誰が匿名か、どの情報が匿名かによって、脱抑制的行動に及ぼす効果が異なることを明らかにし、本論文のアプローチの重要性が示されたといえる。方法論的には、匿名性を実験的に扱うため、また効果を多面的に測定するため、実験設定や測定指標に多くの工夫がみられることも評価される。今後はCMC利用者を対象とした調査など別のアプローチによる検討も望まれるが、本論文で分析された匿名性の効果に関する知見は、現在、Internetのような匿名的対人関係の急速な拡大を考えると、CMC研究に対してのみならず、社会的にも重要な示唆を含み、その意義は大きいといえる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。